

教育哲学会 第68回大会 プログラム



2025年10月4日（土）・5日（日）
神戸大学鶴甲第2キャンパス

大会日程

第1日 10月4日(土)

9:00~	受付
9:30~11:35	一般研究発表(第一部会~第四部会)
11:45~12:45	全国編集委員会(編集委員のみ)
13:00~14:00	総会・奨励賞授賞式
14:15~17:15	研究討議
17:40~19:30	情報交換会

第2日 10月5日(日)

8:30~	受付
9:00~11:05	一般研究発表(第五部会~第八部会)
11:20~12:45	次世代育成企画
13:00~15:30	課題研究
15:45~17:45	ラウンドテーブル

大会前日

14:00~15:00	監査(関係者のみ)	(神戸国際会館セミナーハウス 804 号会議室)
15:00~16:30	全国理事会(関係者のみ)	(神戸国際会館セミナーハウス 804 号会議室)

参加要領

参加申し込み 受付での混雑緩和のため、会員の方は、シクミネットを通じた事前申し込みにご協力をお願いします。事前申し込みの期限は、9月19日(金)です(当日申し込みも受け付けます)。シクミネットの利用手続きがお済みでない方は、学会事務局より4月に送付された案内文書をご確認のうえ、手続きをお済ませください。シクミネットでの事前申し込み後のキャンセル・登録内容の変更・返金には対応いたしかねます。非会員で参加希望の方は、シクミネットがご利用いただけませんので、上記期限までに大会準備委員会メールアドレス(2ページ)にご連絡いただくことで、事前申し込み扱いとなります。

シクミネット <https://pesj.shikuminet.jp/login/>

受付 教室棟B棟東側入口(17・18ページのマップをご参照ください)

大会参加費 一般会員 事前申し込み 3,500円 当日申し込み 4,000円
学生・当日会員 事前申し込み 1,500円 当日申し込み 2,000円

情報交換会参加費 一般会員 事前申し込み 4,500円 当日申し込み 5,000円
学生・当日会員 事前申し込み 2,000円 当日申し込み 2,500円

※現職教員(臨採、非常勤含む)、日本学術振興会特別研究員(DC1、DC2、PD、RPD)の方は一般会員です。

※事前参加申し込みには、上記参加費に加え、振込手数料が別に発生します。

シクミネット
サイトへ



参加要領

一般研究発表にあたって 発表 20 分／質疑応答 5 分
※万一発表を取りやめる場合、発表者は速やかに大会準備委員会(下記メールアドレス)までご連絡ください。なお、欠席者がした場合にも、発表時間の繰り上げは行いません。

大会サイトへ



大会準備委員会メールアドレス pesj68.2025.kobeu@gmail.com

大会サイト (ホームページ) <https://pesj682025kobeu.wixsite.com/taikai-home>

資料等の配布 本大会では、会場での資料配布を行いません。発表者から事前にご提出いただいた資料は、事前にオンラインストレージにアップロードし、PDF形式でのダウンロードを可能とする予定です(詳細は次ページをご覧ください)。なお、会場では配布資料のダウンロードのためのWiFi環境を整える予定です。資料閲覧のための機器は各自でご持参ください。

WiFiの利用 会場内では eduroam がご利用いただけます(ご利用のためには事前にご所属機関でのご登録が必要です)。
※詳しくは https://www.eduroam.jp/for_users をご覧ください。
また、eduroam を利用できない方のために大学のビジター用無線 LAN サービスを用いて、配布資料のダウンロードが可能な環境を整える予定です(パスワードは当日お知らせします)。
ただし、アクセスが集中した際に接続が不安定化する恐れがありますので、ビジター用無線 LAN サービスでは重たいデータの常時送受信はお控えください。

昼食 9月19日(金)までシクミネット上でお弁当の注文を受け付けています。1食1,100円(お茶込み、振込手数料は別途)です。ご注文いただいたお弁当は、両日ともに、11時～13時の時間に、大会受付にてお渡しいたします。なお、土日は、鶴甲第2キャンパス内のショップ営業はありません。

コンビニ・飲食店 キャンパス周辺に飲食店やコンビニエンスストアはありませんので、ご注意ください。最寄りのコンビニは、阪急六甲駅付近になります。

託児・授乳室 託児や授乳室などのご希望は、9月12日(金)までに、大会準備委員会のメールアドレス(pesj68.2025.kobeu@gmail.com)にご相談ください。

喫煙所 神戸大学は敷地内全面禁煙のため、キャンパス内に喫煙所がありません。また大学周辺においても受動喫煙防止について節度ある行動を学生・教職員に求めているところです。ご理解ご協力のほど、お願い申し上げます。

発表要旨集録・発表資料の配布（ダウンロード）方法について

- 発表要旨集録** 今回の大会では前大会同様、発表要旨集録の印刷配布はせず、電子版のみの配布を予定しています。9月中旬に大会サイト(ホームページ)に掲載する予定です。
- 発表資料** 各発表者の発表資料に関しても今回の大会では会場での紙媒体での配布は行わず、電子版のみの配布を予定しています。
資料のダウンロードは大会サイト(ホームページ)から行うことができます。10月3日(木)に掲載する予定です。
- 総会資料** 総会の資料に関しても、今回の大会では電子版の配布を検討しておりますが、詳しいダウンロード方法については会場にてご案内いたします。

第 68 回大会サイト（ホームページ）

<https://pesj682025kobeu.wixsite.com/taikai-home>

- ・会員の方は、郵送された大会プログラムで参加者専用ページ閲覧用パスワードをご確認ください。
- ・非会員で、事前申し込みをされた方には、大会準備委員会から別途パスワードをお送りします。
- ・非会員で、当日ご参加の方には、大会受付でパスワードをお知らせします。

情報交換会

10月4日（土）17時40分～19時30分

- 情報交換会の開催** 今大会も情報交換会を開催する予定です。全国各地からご参加をいただく方々に旧交を温めていただくとともに、教育哲学の分野に新たに加わられた新会員・当日会員とも新たな交流を生み出す場としてぜひご利用ください。第1日の一般研究発表や研究討議の場では語りつくせなかった様々な議論、あるいはそこで触発された新たな着想の共有、第2日の一般研究発表や次世代育成企画、課題研究やラウンドテーブルの予告やそれらに向けた事前の対話など、学会大会の情報交換会でしか行うことのできない交流を行っていただければと願っております。
- 参加者のみなさまの交流がさらに円滑なものとなるよう、兵庫県にゆかりのある日本酒などを揃えて、みなさまのご参加をお待ちいたしております。
- 情報交換会の会場** 情報交換会の会場は、レストランさくら(社会科学系アカデミア館3階)です(17ページの神戸大学キャンパスマップをご参照ください)。大会会場の鶴甲第2キャンパスから情報交換会の会場までは、徒歩で約10分です。神戸市バスもご利用いただけます。市バス36系統の神大人間発達環境学研究科前のバス停でご乗車いただき、約5分の乗車時間で神大正門前のバス停でご降車いただけます。神大正門前のバス停からレストランさくらまでは、徒歩約1分です。

教室棟 B 棟 B106

第一部会 日本の教育思想

司会:高谷 掌子(石川県西田幾多郎記念哲学館)、西村 拓生(立命館大学)

- 09:30 行者の三密行における身心変容とその人間形成学的意義
藤林 優徳(名古屋大学・院生)
- 09:55 西田哲学の信濃哲学会への「応答」とその教育学的意義
—講演「実在の根柢としての人格概念」における人格概念を手がかりに—
本郷 直人(慶應義塾大学・院生)
- 10:20 原子力時代における「類の倫理」の教育思想
—田邊元の哲学から森瀧市郎の核絶対否定への歩み—
川上 英明(山梨学院短期大学)
- 10:45 「自衛隊を憲法に格上げしたら」を哲学的に推論する
寺崎 賢一(元都留文科大学・非常勤講師)
- 11:10 全体討議 (～11:35)

教室棟 B 棟 B108

第二部会 プラグマティズムと教育

司会:上野 正道(上智大学)、中村 和世(広島大学)

- 09:30 エデュセミオティクスにおける「セミオシスとしての学習」の課題と展望:
C. S. パースの「擬似的な解釈者」を手掛かりに
宮坂 朋彦(東京学芸大学・院生)
- 09:55 音楽の教育的価値に関する考察
—ジョン・デューイとジェームズ・L・マーセルの対比より—
林 美春(名古屋大学・院生)
- 10:20 リチャード・ローティの感情教育論:文学の役割に着目して
藤橋 宙生(明治大学・院生)
- 10:45 デューイの芸術理論にみるエネルギー概念の役割
井谷 信彦(武庫川女子大学)
- 11:10 全体討議 (～11:35)

教室棟 B 棟 B208

第三部会 ポスト・ヒューマニズムと人間形成

司会:鈴木 篤(九州大学)、辻 敦子(立命館大学)

- 09:30 データ駆動型教育における「偶然性」の不在とその危険性
于 旻崢(広島大学・院生)
- 09:55 晩期 N・ルーマンの教育論とその人間形成論的展開可能性
尾島 一気(明治大学・院生)
- 10:20 物語る人間にとって読む行為とは何か:
リクルールの「自己の解釈学」における「受容」の行方
朝岡 翔(平成女学院大学)
- 10:45 ポスト・ヒューマニズムの思想とディルタイの教育科学
瀬戸口 昌也(大阪教育大学)
- 11:10 全体討議 (～11:35)

教室棟 B 棟 B210

第四部会 価値の多元性と教育哲学

司会:平田 仁胤(岡山大学)、矢田 訓子(東京音楽大学)

- 09:30 バーナード・クリックの「政治リテラシー」における「寛容」
北村 佳誉(明治大学・院生)
- 09:55 倫理的価値の教育を誠実に行うということ
—倫理的確信と反省をめぐる B. ウィリアムズの思考を手がかりに—
古舘 充斗(東京大学・院生)
- 10:20 デュルケーム『道徳教育論』の未刊資料にみる道徳と神聖の関係
平田 文子(埼玉工業大学)
- 10:45 「非教育的なもの」の教育学的含意 :Nicht-Erziehung 概念を手がかりに
松浦 明日香(常磐大学)
- 11:10 全体討議 (～11:35)

教室棟 B 棟 B106

第五部会 子どもの権利保障と教育哲学

司会:伊藤 博美(椋山女学園大学)、高宮 正貴(大阪体育大学)

- 09:00 結果の平等主義の還元可能性をめぐって
大野 孝太(名古屋大学・院生)
- 09:25 D. アーチャードの性教育論にみる教育への国家関与
—子どもの権利保障と性の倫理をめぐって—
石鍋 杏樹(筑波大学・院生)
- 09:50 教育におけるパターナリズムのケア論的再解釈:
アネマリー・モルの「ケアのロジック」を手掛かりに
坂本 達也(茨城大学)
- 10:15 教師教育者に求められる専門性に関する知識論的考察
岡村 美由規(広島大学)
- 10:40 全体討議 (～11:05)

教室棟 B 棟 B106

第六部会 科学・科学技術と教育哲学

司会:江口 潔(九州大学)、田中 智輝(山口大学)

- 09:00 教育に関わる諸科学の比較研究—「自己調整 self-regulation」を例に—
宮川 幸奈(熊本学園大学)
- 09:25 道徳教育は技術をどう扱ったらよいのか
—フェルバークの『技術の道徳化』を手がかりに—
山岸 賢一郎(福岡大学)
- 09:50 教育における AI との向き合い方はどうあるべきか:
社会システム理論の観点から
鈴木 篤(九州大学)
- 10:15 教育哲学としての実験哲学の可能性
—教育を哲学する子どもの哲学的直観調査を通して—
○ 得居 千照(静岡福祉大学)・河野 哲也(立教大学)
- 10:40 全体討議 (～11:05)

教室棟 B 棟 B208

第七部会 哲学・人間形成・学習

司会:平石 晃樹(東京大学)、宮崎 康子(広島修道大学)

- 09:00 ヒューム『人間本性論』における人間形成——human nature における生成変化の解明
武田 萌(京都大学・院生)
- 09:25 後期ホワイトヘッドの教育のリズム論の再解釈:
1926年講義録における「合理化の段階」に注目して
小島 聖矢(名古屋大学・院生)
- 09:50 ドゥルーズ哲学における「学習」に関する一考察
—『騷—ライブニッツとバロック』における主体と世界の間を手がかりに—
大藤 渉(広島大学・院生)
- 10:15 いかにしてひとを思考させるか
—ジル・ドゥルーズの哲学における「愚劣」と「愚鈍」の違いについて—
手嶋 悠(東京大学・院生)
- 10:40 全体討議 (～11:05)

教室棟 B 棟 B210

第八部会 教育における〈抵抗〉のかたち

司会:市川 秀之(千葉大学)、奥野 佐矢子(神戸女学院大学)

- 09:00 教育学における情動論の意義に関する一考察
—「居心地の悪さの教育学」の誕生と展開を手がかりに—
小野 裕太(東京大学・院生)
- 09:25 バトラー哲学における〈主体の成立可能性〉に関する考察
—「傷つきやすさ」概念に着目して—
小笠原 愛美(広島大学・院生)
- 09:50 教育過程と分析過程との根本的対立について
—C.ミーヨによるフロイト教育論を手がかりに—
後藤 悠帆(兵庫県立大学)
- 10:15 eメディアに対する「あらがう」力
—ソーシャルメディアにおける依存性、個人データ、ポピュリズムにどう向き合うか
村田 育也(大阪産業大学)
- 10:40 全体討議 (～11:05)

教育関係と人間形成 —学校・家庭・インターネットの空間から—

報告者 河野 桃子(日本大学)
大倉 得史(京都大学)
時津 啓 (島根県立大学)
指定討論者 松下 良平(金沢大学・名誉教授)
司会 藤川 信夫(大阪大学)
渡邊 隆信(神戸大学)

近代に成立した学校では、多様な人間集団のなかから特定の年齢層の子どもをすくい取り、彼らに対しプロの教師が意図的、計画的に教育を行うことになった。それは教育関係の合理化と言えるが、同時に2つの意味で教育関係の貧困化を引き起こしたように思われる。1つは、教育の機能が学校に集中し、子どもの成長に関わる学校外の多様な関係が軽視されるようになったことである。もう1つは、学校では教育の主体である教師が客体としての生徒に働きかけるという技術的關係になる傾向があったということである。

こうした教育関係をめぐる問題については、過去の大会(第34回大会1991年、第56回大会2013年)においても取り上げられている。第34回大会では教育関係の構造と問題点が本質論的・原理論的観点から議論された。第56回大会では子どもが主体的に学ぶために教師が教えることの意味について教育者の責任性も含めて議論された。しかし、学校と学校外の生活領域を俯瞰しながら教育関係の問題を検討することは課題として残された。一方、近年急速に進展するデジタル化社会は教育関係をめぐる新たな課題をわれわれに投げかけている。

そこで今回の研究討議では、これまで積み重ねられてきた議論を踏まえながら、学校、家庭、インターネットという3つの空間に着目して、教育関係と人間形成について歴史的かつ現代的に議論を深めたい。

第一に、学校における教師-生徒関係である。現在、生徒の「主体的」で「アクティブ」な学びの必要性が声高に論じられているが、それは近年に始まったことではない。過去を振り返るなら、歴史上、最初に大規模なかたちでそうした学びを追究したのは、19世紀末から20世紀初頭に国際的に展開した新教育の思想と実践であった。新教育においては、学校をひとつの共同体と理解し、学校内外の多様な人間関係の構築が目指された。また生徒の主体性に準拠しながら教師が教育的な働きかけを行うことが試みられた。新教育における教育関係は、今日の学校での教育関係にいかなる示唆を与えるのか。

第二に、家庭での親子関係である。学校制度の拡大に伴って家庭で親が担ってきた教育の役割は縮小してきた。だが、依然として子どもにとって親は、物心がつくずっと前から、無意識のうちに模倣の対象として多くの影響を与える存在である。その意味では、学校の教師よりも親の影響の方がはるかに大きく、根底的である。家庭での親子関係が学校での教師－生徒関係にも影響を及ぼし得るとすれば、その親子関係の特質は何か。また現在の多様化する家族形態のなかで親子関係はどのように変化しているのかを、学校での教師－生徒関係と関連させながら検討することも、重要な課題である。

第三に、インターネットを介したオンラインでの教育関係である。ICTの拡張によって、フェイス・トゥ・フェイスの関係に加えて、オンラインでの関わりが可能となった。「いま、ここで」の対面の関係でしか伝えることのできない個人や集団の雰囲気や機微があるが、時間と空間を超えて可能となる教師と生徒の関係、生徒同士の関係、そして学校外の多様な人々との関係は魅力的である。同時に開かれたインターネット空間であるがゆえの関係の危うさもある。オンラインでの関係が孕む可能性と課題を前にして、学校での教師－生徒関係や家庭での親子関係に何が求められ、また何が求められなくなるのか。

本研究討議では、報告者として学校空間の観点から河野桃子会員(日本大学:シュタイナー研究)、家庭空間の観点から大倉得史氏(京都大学:発達心理学(関係発達論))、インターネット空間の観点から時津啓会員(島根県立大学:メディア教育研究)、指定討論者として松下良平会員(金沢大学名誉教授:教育原論)に登壇いただき、教育関係と人間形成について多面的に議論していきたい。

11:20~12:45

教室棟 B 棟 B208

教育哲学と教育実践の乖離をどう埋めているか？

登壇者 奥野 佐矢子(神戸女学院大学)
岸本 智典(鶴見大学)
間篠 剛留(日本大学)
&グループディスカッション

本学会の多くの若手会員は、大学・短大・専門学校で教員免許・保育士資格取得に必要な科目を担当することからキャリアをスタートさせる。このとき直面する大きな問題のひとつ、それは〈研究〉と〈教育〉とのあいだの隔たりではないだろうか。担当科目の標準的な教科書に自身の研究がうまくフィットしない、教育学全体が実践志向を強めるなか教育哲学の本分であるいわゆる「原理」的な問いを扱いつらくなっている、などのケースが考えられることだろう。今日ではまったく専門外の科目を担当することももはや稀ではない。では、そうしたさまざまな隔たりを少しでも埋めるべく、会員は日々どのような苦労をいかにして乗り越え工夫を積み重ねてきたのだろうか。

本学会ではこれまで、特別課題研究「教員養成課程における教育哲学の位置づけに関する再検討」(2007年10月~2010年9月)や『教育哲学研究』誌第116号での特集「教育哲学と社会—教育哲学のrelevanceを考える」(2017年11月発行)などで類似の問題について知見を蓄積してきたが、本企画はより素朴ではあるが切実でもある次のような関心に根ざしている。それは、学会が研究交流の場だとすると、学会を終えたあとそれぞれの会員は普段どのような講義をおこない演習を運営しているのだろうか、というものだ。普段は学会の表舞台にはあがらない教育哲学研究者の日々の教育実践にまつわる苦労と工夫を語りあいながら共有すること、これが本企画のねらいである。閉会後には参加者各自が少しでも前向きな気持ちで自分の持ち場に戻れるような機会になればと願っている。

上記の主旨をふまえ、登壇者3名にはインタビュー形式で、実際の授業における苦労や工夫などをご報告いただく。その後、参加者全員でグループに分かれ、ざっくばらんな情報共有・意見交換の機会を設ける。後日、多くの会員からご参加・ご意見をいただくことを目的として、事前にオンラインでの参加登録案内や質問収集を予定している(詳細は大会HP等をご参照いただきたい)。会員の皆様のご参加を願うものである。

※ランチタイムセッションのため、必要に応じてお食事と飲み物をご持参ください。

例外状態と当事者性 —阪神・淡路大震災の記憶から教育の極限を問い直す—

報告者 渥美 公秀(大阪大学)
池田 華子(大阪公立大学)
山名 淳(東京大学)
司会 岡部 美香(大阪大学)
李 舜志(法政大学)

今年の教育哲学会大会は、1995年1月17日の阪神・淡路大震災から30年目に神戸の地で開催されます。理事会では、やはりこの災害の記憶から今回の課題研究を企画したい、ということになりました。

この震災以後、さらには2011年の東日本大震災を経て、教育学の中でも、たとえば災害時の子どもの心のケアや防災・減災教育については多くのことが語られるようになっていきます。が、それにとどまらず、災害あるいは厄災という極限の不条理の体験は、教育という基本的に未来志向の営みの原理的な可能性(あるいは、むしろ不可能性)への教育哲学的な問いをも、あらためて惹起しました。既に本学会の会員諸氏によって、それをめぐるいくつもの根源的な思索が提起されてもいます(山名淳・矢野智司編著『災害と厄災の記憶を伝える——教育学は何ができるのか』勁草書房、2017年)。

今回の課題研究では、それらの思索を踏まえつつ、阪神・淡路大震災から30年という時を意識したとき、あらためて教育学は何を問うことができるのかを考えたいと思います。その際に浮かび上がったキーワードが「例外状態」と「当事者性」です。

カール・シュミットに由来する前者の概念は、アガンベンの同名の著書によって近年、再び脚光を浴びていますが、前世紀末から私たちは、それに該当するような事態に繰り返し直面しています。たとえば2001年の同時多発テロ後のアメリカと世界、新型コロナのパンデミック、イスラエルによるガザでのジェノサイド、…そして我が国での大震災の経験もまた、そこでは法と生との「非-関係」が露呈する、いわば例外状態であったと言えるでしょう。他方、阪神・淡路大震災の現場では、通常の統治機能が停止した状況下、市民によるヴォランティアな“公”性が立ち上がったことが報告されています。アガンベンが例外状態やホモ・サケルの概念を通じて描き出す生政治の否定性と、その彼方に遠望しようとしている「到来する共同体」のイメージに、私たちは大震災の両義的な経験を重ね合わせて考察することができる／すべきでしょうか。そしてそこに、教育という“公”的な営みの限界と同時にオルタナティヴな基底を見ることができでしょうか。

※ アガンベンに固有の意味での「例外状態」の概念をこのシンポジウムの問いに適用できるか否かは、あるいは議論の余地があるものと思われる。しかし、今回は厳密なアガンベン解釈の如何に踏み込むよりは、この概念を一つの触発的契機として受けとめて、創造的に議論を展開できればと願います。議論の前提となるアガンベン、そしてベンヤミンやシュミット概念については、後掲の「プレ企画：読書会」において基本的な共通理解を図った上で、大会での議論に臨みたいと思います。（この「プレ企画：読書会」の際のレジュメは、大会当日に資料として共有する予定です。）

また、阪神・淡路大震災については、30年の時を経て、その体験の継承・伝承が課題とされるようになっていきます。同じ問題は、アジア太平洋戦争後80年の今、戦争や被爆の体験についても指摘されています。この、不条理な受苦の体験を語るべき“当事者”とは誰か、という原理的な問いについても、アガンベンの思想は示唆的です。『例外状態』のなかで彼は、今日ではそれが常態化して「統治のパラダイム」になっている、と論じます。そのことは、私たちはみな、潜在的には（潜勢力においては）ホモ・サケル＝「剥き出しの生」である、ということを意味します。このラディカルな指摘は、受苦の“当事者”の概念を揺さぶるように思われます。そのとき、原理的に表象化＝再提示(representation)を課題とする教育という営みにおいて、不条理な受苦の体験は誰によって、いかに語られることになるのでしょうか。そして、根源的にかげがえない、そもそも語り得ない体験を、敢えて一般化して社会的に語ろうとする教育学という企図は、それでもなお可能でしょうか。

シンポジウムでは、阪神・淡路大震災の想起を契機に、「例外状態」と「当事者性」という概念に即して、あらためて教育と教育学の極限を省察しつつ、にもかかわらず、その向こう側に希望を展望することができるか、問いたいと考えます。その手がかりとして、以下の方々に報告をお願いします。渥美公秀氏：社会心理学、グループ・ダイナミクス。阪神・淡路大震災に遭い、ボランティア活動に参加したことをきっかけに災害ボランティア活動を研究。NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク理事長として、災害ボランティアの実践にもコミットし続けておられます。著書『災害ボランティア——新しい社会へのグループ・ダイナミクス』（弘文堂、2014年）ほか。池田華子会員：上記の『災害と厄災の記憶を伝える』では、人間の不幸——決して答えの得られない圧倒的な空白に向けて放たれる「なぜ」——にいかんにか関わることができるかを問うシモーヌ・ヴェイユの「方法」を考察。近年はオープン・ダイアログを中心とする対話実践に関心を寄せつつ、その対話主義についても原理的に検討しておられます。山名淳会員：編者を務めた『災害と厄災の記憶を伝える』では、災害の記憶の「教育化」と「脱教育化」のせめぎ合いを、ヒロシマをめぐる「記憶のポリテクス」に即して考察。続いて『記憶と想起の教育学：メモリー・ペダゴジー、教育哲学からのアプローチ』（勁草書房、2022年）の共同研究も主導して、記憶・想起と教育・人間形成との関係を原理的に考察し続けておられます。

「課題研究」プレ企画：読書会について

大会に先立ち、議論の契機とするアガンベンの「例外状態」の概念の基礎的な共通理解を図るために、プレ企画としてオンラインでの読書会を開催します。

日時:2025年9月1日(月)および9月3日(水)15時~17時

第1回(9月1日):

アガンベンの『例外状態』(上村忠男・中村克己訳、未來社、2007年)を、特にシュミットとベンヤミンが論じられている第2章と第4章を軸に読みます。最初に、アガンベンを研究テーマにしておられる寺道亮信会員(東京大学大学院)にレジュメをご担当いただき、30分程度でテキストの内容を報告していただきます。それを受けて、3~4名ずつブレイクアウトルームに分かれて、40~50分程度、グループで議論していただきます。その後、全体に戻り、グループでの議論を共有して終わります。

第2回(9月3日):

ベンヤミンの「暴力批判論」(浅井健二郎訳『ドイツ悲劇の根源 下』ちくま学芸文庫、1999年 所収)とシュミットの『政治的神学』(権左武志訳、岩波文庫、2024年)を読みます。前者は、ベンヤミンを研究テーマとしておられる浅井健介会員(奈良教育大学)に、後者は、20世紀ドイツ思想史に造詣の深い白銀夏樹会員(関西学院大学)にレジュメをご担当いただき、それぞれ20分程度でテキストの内容をご報告いただいた上で、前回同様にグループで議論、最後に議論を共有します。

(なお、ベンヤミンとシュミットについては複数の邦訳がありますが、上記を使用します。ベンヤミンは現在、品切れですが、古書は比較的容易に入手できます。)

※ 参加を希望される方は、下記の zoom 会議室への登録フォームにご登録ください。どちらか一日だけの参加も可能です。締め切りは8月25日(月)とします。

9月1日 <https://zoom.us/meeting/register/MJKiJ0XaRRKUZKfAsqbd6Q>

9月3日 <https://zoom.us/meeting/register/6yy17tSmQnGtQDgUXpON9w>

問い合わせ先:課題研究企画担当理事 岡部美香(大阪大学) mioka@hus.osaka-u.ac.jp

西村拓生(立命館大学) takuo@fc.ritsumei.ac.jp

15:45~17:45 教室棟 B 棟 B106

RT 1 「哲学者としてのヘルバルト」の再発見：新カント派の源流を求めて

企画者	小山 裕樹(聖心女子大学) 森 祐亮(大阪大学)
司会者	森 祐亮(大阪大学)
提案者	太田 匡洋(名古屋工業大学) 下山 史隆(京都大学・院生)
指定討論者	浅野 将秀(神戸大学) 小山 裕樹(聖心女子大学)

ヘルバルトは、教育学において「近代教育学の創始者」としての地位を確立していると言える。カントの衣鉢を継ぎつつも、自らの思索を近代教育学の創出に捧げ、その功績はいわゆる「ヘルバルト学派」に受け継がれ、国民国家の勃興とも連動する形で大いに権勢を奮った。その存在は、現代の日本でも無視することのできないものである。そのようなヘルバルトであるが、実は哲学の分野でも、19世紀においては教育学に劣らず影響力を有していた。ヘルバルトは極めて難解な形而上学を構想し、いわゆるドイツ観念論とは異なる道を模索した思想家でもあった。ヘルバルトの哲学は、同時代のフリースなどとも部分的に共鳴しつつ、ロツツェやコーヘンといった新カント派へと連なる系譜にも大いに流れ込んでいった。本ラウンドテーブルでは、こうしたヘルバルトの「哲学」に焦点を当てることで、今一度彼の教育学を新たな光のもとで浮かび上がらせることを目指す。

15:45~17:45 教室棟 B 棟 B108

RT 2 民衆思想における知のオルタナティブ

企画者・司会者	高橋 舞(文京学院大学)
提案者	花崎 皋平(所属なし・民衆思想家) 岡部 美香(大阪大学) 小野 文生(同志社大学) 高橋 舞(文京学院大学)
コメンテーター	生澤 繁樹(名古屋大学) 平田 仁胤(岡山大学)

民衆思想のなかに、近代的学知のシステムの正統にはかならずしも収まらないような周縁的な知、あるいはそうした正統に対してオルタナティブを求めるような知の運動が、あったのではないかと。教育哲学研究は、そのような周縁的な知、あるいはオルタナティブを求めるような知の運動を、どのように受けとめることができるだろうか。そのような問題関心をもとに、私たちは、民衆思想のなかにある別様の知の運動のかたちを、さまざまな対象を手がかりに浮かびあがらせてみたいと考えた。

本ラウンドテーブルは、科研を得て6年に亘る共同研究『民衆思想にみるカタストロフィーの記憶継承技法の教育学的可能性』を行ってきた総括の場として企画されている。当日は、民衆思想研究により浮かび上がってきた知のオルタナティブの可能性について各自が提案すると共に、共同研究に協力して下さった民衆思想家・花崎皋平氏にもオンライン参加で発表いただく予定である。コメンテーターにも加わっていただき、フロア全体で、新たな教育思想の展望を見据え、関連に議論を交わしていきたい。

RT 3 総合大学の学びにおけるアート制作の可能性 —ABRに基づく学際的共同研究の報告と展開—

企画者	門前 斐紀(金沢星稷大学)
提案者	寺嶋 雅彦(金沢星稷大学)
	櫻井 あすみ(美術家/江戸川大学・非常勤講師)
	三好 風太(美術家/横浜美術大学美術・非常勤講師)
	門前 斐紀(金沢星稷大学)

「美術大学」「芸術大学」ではアート作品の制作が教育課程の主軸となるが、「総合大学」においては、アート制作が授業内の学習に取り入れられることは稀である。しかし、Arts-Based Research(ABR)では、アート制作は、従来の質的研究や量的研究とは異なる仕方、自己や他者、世界について、新たな発見や理解をもたらすアプローチとして位置付けられる。発表者らは、ABRに依拠した共同研究を通し、総合大学のさまざまな科目(例えば「哲学」「美学」「社会学」など)にアートの制作過程を取り入れ、授業のモデル化を試みてきた。授業に制作を取り入れることは、学生が思考を柔軟にし、深化させ、身体化を伴ういきなり知識を得るきっかけとなるのではないか。本ラウンドテーブルでは、発表者らの授業モデル作成の試みを先行研究に位置付けながら紹介するとともに、アートを用いた新たな高等教育の手法としての可能性や限界について、フロアの参加者を交え議論したい。

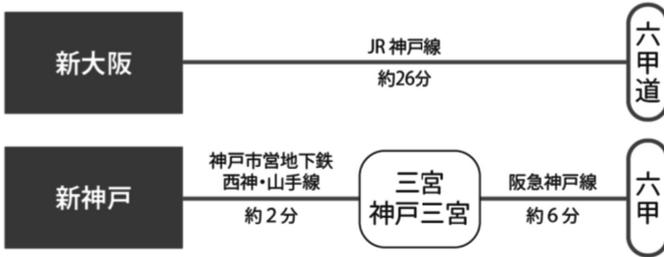
RT 4 大学教育と公共性

企画者	村松 灯(帝京大学)・田中 智輝(山口大学)
司会者	田中 智輝(山口大学)
登壇者	藤本 夕衣(昭和女子大学)
	山本 圭(立命館大学)
	村松 灯(帝京大学)・田中 智輝(山口大学)
指定討論者	小玉 重夫(白梅学園大学)

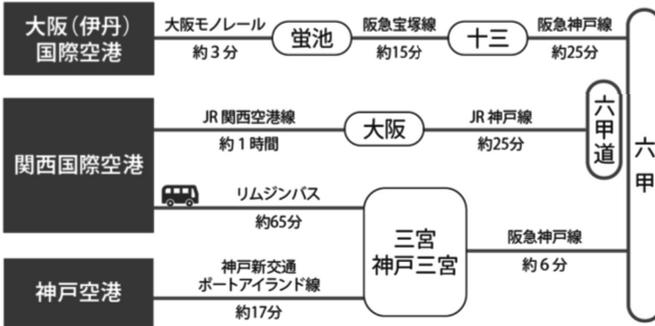
大学や学術が公共的な使命を負い、また同時に、公共性に開かれたものであるということは、今日大学内外の人びとにどれほどのリアリティをもって共有されているだろうか。例えば、日本学術会議の任命問題に端を発する一連の動向を見ても、学術界の反応と市民の関心の間には開きがあるように思われる。また、大学教育に関しても、とりわけ初年次教育等では、大学での学びと職業社会とのつながりが強調される一方で、公共性や公的な事柄との結びつきについては、さほど重視されていない傾向がみられる。企画者らは、これまで大学初年次教育について議論を重ねてきたが、そこで明らかになったのは、大学初年次教育をめぐる問題は、教育の内容や方法といったレベルで解決できるものではなく、大学教育ないし大学のあり方についての議論を避けて通ることはできないということであった。本ラウンドテーブルでは、以上のような問題関心から、大学教育のあり方について「公共性」という視点から問い直すことを試みる。特に、1990年代以降の大学と公共性という問題をどのように理解すればよいかを中心的な問いとして、今日大学が直面している困難を思想的に明らかにしたい。

神戸大学鶴甲第2キャンパスへの交通アクセス

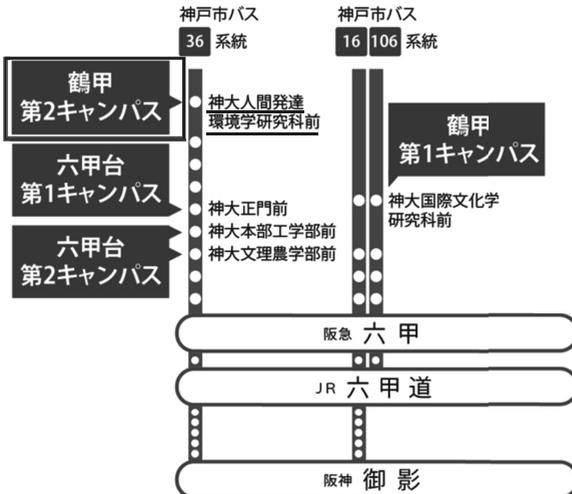
新大阪駅・新神戸駅から



空港から



駅からのアクセス



阪神御影駅・JR 六甲道駅・阪急六甲駅から鶴甲第2キャンパスへ(市バス 36 系統経由)

鶴甲第2キャンパスまでは上り坂で、最寄りの阪急六甲駅からでも徒歩だと約25分かかります。バスのご利用をおすすめします。神戸市バス 36 系統「鶴甲団地」行き(「鶴甲 2 丁目止」行きでも可)をご利用ください。

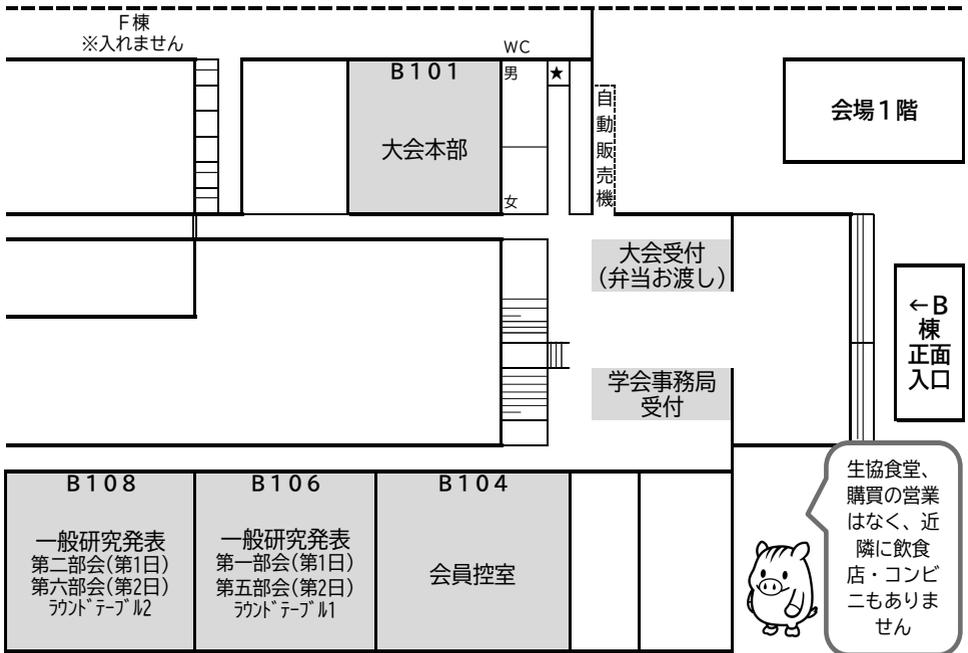
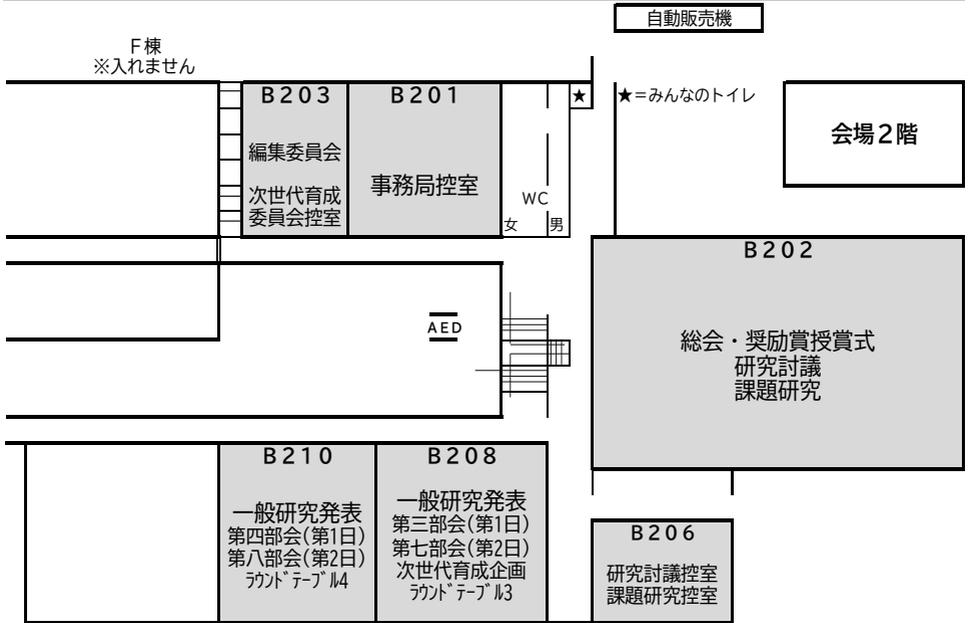
鶴甲第2キャンパス到着後、受付へ

「神大人間発達環境学研究所前」降車後、受付までは徒歩約1分です。

タクシーをご利用の場合

行先は「神戸大学」だけでなく、「鶴甲第2キャンパス」または「神大人間発達環境学研究所」と併せてお伝えください。

会場マップ (教室棟 B 棟周辺)



MEMO

A series of horizontal dotted lines for writing.

[教育哲学会第 68 回大会 準備委員会]

委員長	渡邊 隆信(神戸大学)
事務局長	白銀 夏樹(関西学院大学)
事務局長補佐	西口 啓太(関西学院大学)
準備委員	安喰 勇平(神戸市外国語大学)
	大関 達也(兵庫教育大学)
	奥野 佐矢子(神戸女学院大学)
	田中 伸(神戸大学)
	林 照子(甲南女子大学)
	山内 紀幸(神戸女子大学)
	山口 裕毅(兵庫県立大学)

Philosophy of Education Society of Japan
68th Annual Conference
October 4-5, 2025
Kobe University, Tsurukabuto 2nd Campus

